

2021 年度大学院生発表奨励賞

優秀賞

「ホスト」になる

一埼玉県入間市・ジョンソントウンの事例から観光研究に向けて

立教大学大学院観光学研究科 中植渚

<講評>

本報告は、埼玉県入間市のジョンソントウンを事例に、人びとが「自由意志」に基づいてホストになるプロセスについて考察したものである。既往研究においては、新植民地主義やポストコロニアリズム的な視座から、ホストに「ならざるをえない」人びとの文化やアイデンティティが問われてきた。しかし、これまで彼／彼女らにまなざしを向けてきた側の国々においても、観光振興の進展により誰もがホストになりうる状況が生まれている。報告者の問題意識はこの点にあり、長期にわたる聞き取り調査、参与観察と資料調査を基にして、ホストに「なる」プロセスの内実を迫ろうとする。

ジョンソントウンへの移住者たちは、自らの選択に従ってホストになっているが、移住がすなわち永続的なホストとなることを意味するわけではない。移住者たちは、ゲストのまなざしを内面化してホストになることを選びとっている。また彼／彼女らの意識の面でも街の構造においても、永住は前提とされておらず、いわばライフステージの一つの段階としてホストになることが位置づけられている。そこでは生活と観光は不可分な関係性にあり、移住者たちの日常生活は観光を含みこむ形で成立している。こうした状況を、報告者はライフスタイル移住という鍵概念を用いて、また消費社会の構造を踏まえながら考察している。

本報告で高く評価できる点として、以下の 2 点を挙げられよう。第一に研究の新規性や発展性がある。本報告は既往の観光研究の限界を十分に踏まえた上で、ホスト／ゲストの関係性が流動的に構築されていくプロセスを、聞き取り調査や参与観察から実証的に示している。また、移住先での生活が観光によって再編される様子を描出することで、「観光化する社会」の具体像を示している。これらを通して、今日における観光のあり方の一端を示すとともに、今後の観光研究に求められる視座を提示した点は高い評価に値する。

第二に、移住もまた完全に自由意志とは言えず、あくまで相場より高い賃料を払える人のみに移住が許され、また街自体の構造が永住を前提としていない点を取り上げつつ、そこで移動が個人の責任と結びつけられる様子を鋭く指摘するなど、社会構造にも目配りつつ多角的に事例を考察することに成功している点である。

一方で残された課題としては、ジョンソントウンにおける時間的な変化とそれに伴う移住者たちの意識の変化が、発表の中に充分に取り上げられなかった点、また、この事例の社会的インパクトへの言及が少なかった点がある。これらについては報告者のさらなる考察を期待したい。

総じて、いくつかの課題を指摘できるものの、既往の観光研究と今日的な観光研究を架橋しつつ十分な実証性を持つ研究として高く評価できる。